

の園の神話を逆に扱っていると言って良い。そして彼女もまた「楽園」を去らなければならない。それは彼女が現代に生きているゆえの宿命なのであり、ここに『太陽』のリアリズムがある。また、彼女は心を惹かれる農夫とは交わることはできない。当時は農夫の身分は、ジュリエットやモーリスの中産階級とは異なって身分が低い、と考えられていた。農夫の方から彼女に近づくことは常識的に考えられないし、彼女もまた身分階級に囚われている。それを破ることは犯罪に等しいと思われるのだ。21世紀の現代とは違い、ロレンスの生きていた時代においてはそうであった。

最終的にはモーリスとまた夫婦関係を持つとしても、ジュリエットは一時的にせよ、「太陽」を恋人として生き、その化身とも思われる農夫に出会ったことによって、心身がかなり再生したと思われる。

『太陽』という小説では、現代人は完全に「楽園」に帰ることは出来ないのである、という悲劇を呈示していると考えられる。そして聖書からの引用があり、聖書の枠組が感じられることや、イタリアが舞台になっておりギリシア・ローマ神話に登場する「ペルセウス」という人物が書かれていたりすることから分かるように、ロレンスの作品には、「太陽」に限らず、神話的な要素が非常に多く入っている。

ロレンスの神話の世界では、現代の男女が古代の自意識に縛られていない生き方を求めて悩みまどい、花、木、鳥、獣、月、太陽、風、星、大地、火などの自然界と関わることによって人生を模索する様が感動的に描かれているのである。そしてロレンスにとっては、人間が正常な状態を獲得する上で、このような大自然との交感が欠くべからざるものであったのである。

注：本原稿は、2007年度に筆者が担当した科目「英文小説購読」の春学期の講義ノートの一部に加筆したものである。

参照：ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン共著

金光仁三郎・熊沢一衛・小井戸光彦・白井泰隆他訳
『世界シンボル大事典』（大修館書店、1996）

語彙と聴解について —その個人的アプローチ—

名古屋語学教育研究室
服部 茂

『語研ニュース（第17号）』にて、精読のすすめとして読む学習法について述べた。今回は、その続編として語彙と聴解について述べてみたい。

どの言語学習においても語彙力は不可欠である。語彙力がなければ、聴けない、話せない、読めない、書けない。したがって、学習者にとって語彙力、つまり単語、熟語は最も大きな課題である。しかも、問題なのは、どう効率的に必要な語彙を必要数記憶するかである。その記憶法を工夫している人もいれば、記憶に苦手意識をもつ人もいるだろう。いずれにせよ、若い時期に語彙力を身につけなければ、その後の英語学習に大きく影響を及ぼすので遅くても、大学1、2年生までにはまとまった必要数の語彙力を身につけたい。

単語などの記憶法には個人差がありそれぞれ自分流のプロセスがあるので、一概にそれを提示することはできない。自分に合った方法を見つけることが先決である。だから、私一個人の記憶法が学生諸君に合うかどうかかわからないが、私が行なった方法について反省（カッコ内で言及）を込めながら述べてみる。

私は高2の夏休みに、単語（約2000）、熟語（約1000）の単語帳を買いその夏中すべてその記憶に努めた。当時、英語は語彙力だと思い込みひたすら覚えまくった。そのやり方は、単・熟別で1

日100語ずつレポート用紙 (B5) に書き写し、動詞、形容詞、副詞といった派生語は後回しにして、単語帳の1番目の単語から代表的な意味を2つ3つ書き、日本語の意味をしおりで隠し、上から下まで単純に覚えていった (熟語も同じ)。レポート用紙も数十枚に達するとそれをファイルした。レポート用紙の右上に番号をつけ今日はナンバー5、明日は6といったように復習をして、覚えられない単語は赤で印をつけ、徐々に絞り込んでいった。時としてなかなか覚えられない単語は、無理に日本語で覚え、ごまかしたりして頭につめ込んだ (本当は良くない覚え方)。記憶する際、例文を読んだり、自分で発音してみることは一切なく、ただひたすら覚え込んでいった。数ヶ月もすると少し自信がついてきた。大学入試用の長文を読んでも知らない単語が少なく、以前と比べるとスムーズに読めるようになり、覚えた実感がわいた。さらに、長文で読んだ文からも知らない単語、熟語を拾い同じ要領でレポート用紙に書き写し、平行して記憶した。長文を読むことで単語を記憶する際の例文の役割を果たした (例文で単語の実際の使い方を理解することは大切)。発音に関しては、ほとんど度外視であったので、その後やり直し発音も正しく覚えることになった。これはやや時間を要した (本来は発音も同時に行なうのがベスト)。今から考えると決してスマートな覚え方ではなかった。紙に書いたり、間違った発音で覚えたりした (高校生の時は語彙力が全と思いついて、覚えることに終始していた)。良かった点があるとすれば、もしかしたら記憶力の筋肉は、この時に鍛えられたかもしれない。その後、知らない単語もすぐに覚えられるようになった。しかし、本当の意味で単語 (基本語) を身につけたのは、その後の文法や読解の学習を通してであった。単語の多用な意味や奥深さを感じた。英文を読むことにより、語彙の使い方を習熟していった。

もし、語彙力に自信がない人は、「短期集中」でやってみることをおすすめする。1日100個とノルマを決め覚えまくる。そうすると大体1ヶ月

もすれば目処がついてくる。とにかく、大量に記憶することに努めるのである。ここで肝心なことは、忘れることを恐れないことである。要は“たくさん覚えてたくさん忘れる”。忘れることを前提にやり、忘れたら何度でもくり返し復習することである。私は高2で行なったが、まだ大学生なら十分に覚えられるはず。単語、熟語を記憶することは退屈な作業ではあるが是非乗り越えてほしい。先に述べたが、あくまでもこれは、私個人 (それも、初期の学習者時代) のやり方であり、各自自分流のやり方があるのは言うまでもない。最近、もっとスマートに記憶できる単語帳や方法論、また科学的な研究に基づく記憶法もあるようなのでそちらを参照するのもいいと思う。身近な先生方に聞いてみるのも参考になるだろう。思わぬいい勉強法やエピソードが聞けるかもしれない。

次に聴解 (リスニング) について述べる。リスニングは英語の音をたくさん聴くことも大切であるが、やはり「音を知る」という観点からも重要である。文法を理解し、語彙も覚えなければならぬと同じ様に、音についても「知る」ということが大切である。音の性質や規則を確認して聴くことでも大きくその学習効果に違いが出てくる。例えば、英語と日本語のリズムの違いや、発話で強く発音される内容語 (名詞、指示代名詞、形容詞、疑問詞、一般動詞、副詞) と弱く発音される機能語 (冠詞、前置詞、人称代名詞、所有代名詞、関係代名詞、接続詞、助動詞) といわれる規則がある。また単語は、発音記号通り読まれない。隣り合う語と影響し合い変化する音、例えば連続されて発音される「音の連鎖」、一部の音が消える「音の脱落」、ある音が隣の音に変化する「音の同化」、語の一部が省略される「音の短縮」などといった規則を知ることが必要である。こういったことを、まとまった英文 (好きな英文でも可) を内容語と機能語に色分けして音読することでリズムを体感する上で有効な方法であろう。

リスニングを苦手としている人は、いっその事、急がば回れで、発音記号からやり直してみてもどうであろうか。正しい音を確認し、正確にその音

を覚えるのである。母音だけでも日本語より多く、その違いを知るだけでもリスニング力向上の第一歩となる。正しい発音、英語の音を知ると、上で述べた音の連鎖、脱落、同化など変化する音に対応できるようになる。ディクテーションをやる際、穴うめできた単語はその音を知っていたから聴けたのであり、音を知らなければ当然聴けないのである。

ある程度のリスニング力のある人は、リスニングを聴くことに限定して学習することに加え、「推測力」を向上させる学習法も聴く力を養う上で実際的であると思われる。

リスニングは一見、受動的な学習であるように思われる。しかし、工夫次第では実際のやり取りを想定した上で、より実践的な学習に転換できる。ここでは、ただ音を聴くという受動的な姿勢から、自ら音を取りにいく能動的な姿勢を養う聴き方を提案してみよう。それは、「聴く」から「推測」への学習。私たちは普段、日常会話をする際、相手とのやり取りの中で、かなりの部分で話しの流れを半ば推測しながら聴いており、だからこそそのとき、うなずいたり、同感したりして態度に示すことができる。そうした行為をリスニングの学習のときに役立ててみる。例えば、あるまとまった英文を聴いたとき、ほとんど理解できなかったとしよう。まず、英文の中で聴こえた英単語を拾い、その単語を基に推測してそのストーリーを予想してみる。例えば話された英文で“Christmas” “bargain” という単語を聴き取ったとき、どのようにイメージするだろうか。プラスかマイナスか、明るいのか暗いのか、喜んでいるか怒っているかなど。そういったイメージだけでもよい。“Christmas” と聴けばプラスのイメージが浮かぶであろうか。寒いと感じるかもしれない。あるいは雪が降っていると考えるかもしれない。“Bargain” と聴いてマイナスのイメージをもつ人は少ないであろう。多くはプラスのイメージで推測できよう。要は、一般的な常識をはたらかせて聴くことである。ここで強調したいことは、自ら単語をつかみにいくことにより、能動的に聴

く態度を養い、実際的なコミュニケーションの場を想定して聴く姿勢である。聴くことは能動的な行為なのでリスニング学習を聴く学習だけに留めず、「推測力」を高める学習として取り入れたい。

以上、私的な経験を含めた語彙力の記憶法とリスニングの学習法を紹介した。少しでも学生諸君の英語学習の参考になれば幸いである。最後に、私たちは、日頃から「コミュニケーション」と一言で言っているが、このコミュニケーションの行為は公私の場面を問わず最も難しいのではないかと痛感する。公的な場合は勿論のことであるが、私的な場合にも語彙力の他に、教養、関心、興味、知識、ユーモア、人柄に加え、見解、見識も問われる。時として誤解される場合もありうる。言語運用力に影響を与える日常の行ないも大切にしなければと改めて思う。

ボーンヴィル —チョコレート工場の ために作られた村

経営学部
安藤 聡

バーミンガムの郊外にあるカドベリー社（慣用的表記では「キャドベリー」）の工場は世界でも有名なチョコレート工場のひとつである。童話作家ロアルド・ダールがダービーシャー州のレプトン・スクールに在学していた頃、寮には時々カドベリー工場から開発中の新製品の見本が送られてきて、生徒たちがそれを試食してアンケートに答えていたという。ダールはサンプルが送られてくるたびに、秘密の研究所のような新しいチョコレートの「開発室」とそこで働く自分の姿を空想していた、と自伝『少年』に書いている。このよ